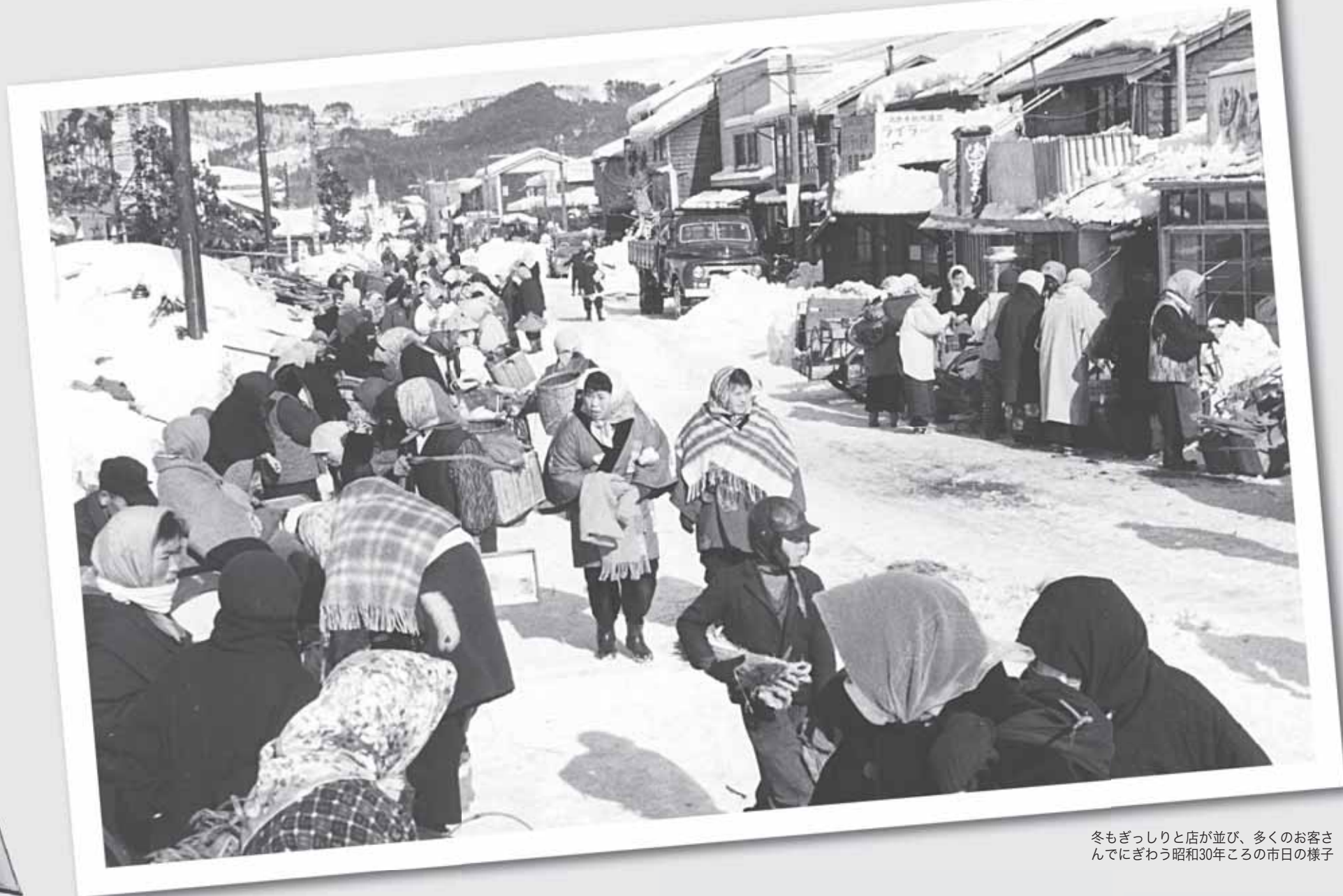


# 市日のヒカリ



冬もぎっしりと店が並び、多くのお客さんでにぎわう昭和30年ころの市日の様子

## Interview 振り返る市日



みんな楽しみに  
待っていました

外館吉右衛門 さん  
(川貫)

わたしは以前、十八日町に住んでいました。にぎわうだけでなく、食などの情報交換や、温かい交流がある市日を、みんなが楽しみに待っていました。戦後、本町で三日市が開かれたように、市日とまちは一緒に盛り上がってきたように思います。

今も昔も市日の雰囲気は変わりません。移り変わる時代の中で続けるには、関係者の努力と苦労があったと思います。みんなに親しまれてきた市日。今後も続いてほしいですね。

## 久慈市史にも市日の歴史

旧久慈市時代に発刊された久慈市史（全6巻）には、さまざまな歴史が網羅されています。

第2巻「通史近世」には、流通経済の展開と在郷商人の台頭として、市日の始まりや町の成り立ちについても記録されています。



## 町を形づくり ともに歩んだ 市日の364年

## 歩み

360年以上の歴史を誇る市日。人が行き交い、にぎわってきた市日ですが、客数は減少し続けています。大型スーパーの出店やインターネットの普及など、暮らしが便利になった現在も続く、昔ながらの顔を合わせての商売。そんな市日には、現代社会が忘れがちな、大切な何かがあるような気がしてなりません。長い歴史を歩んできた市日の魅力を探りました。（7ページまで）

### 藩政時代から続く

毎月6回、3と8がつく日に中町で開かれている市日。まちに溶け込み、久慈市の風物詩になっている市日には、藩政時代（江戸時代）から続く長い歴史があります。久慈の市に関するものもとても古い記録は今から364年前の正保3年（1646年）。



市日は昭和52年10月から現在の場所に

同年10月7日の盛岡藩の雑書（藩政時代の盛岡藩家老の執務日誌）に、現在の大川目町に三日市（3のつく日の市）が開かれていた様子が記されています。「町」とは「市」をいっていますので、このころから3と8のつく日に久慈で市が開かれ始めたと考えられます。当時、定期的に市を開くことは、わずかな地方に許される程度でした。城下町や他の中心地区と同じように市が開かれていたことから、久慈の町が経済や文化、交通の要所として栄えてきたことがうかがわれます。

### 移転で今の中町に

藩政時代が幕を閉じる前後、現在の大川目町で開かれていた三日市は廃止されたといえます。終戦後、本町で復活した三日市は徐々に出店が増え、当時は、八日市が開かれていた二十八日町に移転

これにより三日市も八日市と同じ場所で開かれるようになりました。しかし交通量などの関係から中の橋通りに再び移転。昭和52年10月に中町に落ち着き、今に至っています。時代によって、市日が開かれる場所は変わりましたが、八日町、十八日町、二十八日町と、今も地名として残るようには、市日が開かれた場所には人が集い、人が住み、町として栄えてきました。地名には残っていませんが、宇部町でも二日の市が開かれていたといえます。

今も一部の人からは「町の日」と呼ばれる市日。市日は久慈の現在の町を形づくり、町とともに長い歴史を歩んできたのです。